

愛国と民主の背後にあるもの

—水羽信男『中国の愛国と民主—章乃器とその時代』（汲古書院，2012年）を読む—

緒形 康

2009年に中国の論壇に衝撃を与えた1つの事件を紹介することから、この書評を始めたい。この年の3月19日付『南方週末』で、聶紺弩の冤罪が聶の親友、黄苗子の密告に由来することを暴いた章詒和の文章が掲載された。4月2日、同じ著者が、父である「右派」章伯鈞の日常生活を監視するスパイとして、長く『読書』編集長を務めた馮亦代が送り込まれていたことを告発した。これらをめぐって4月29日に行われた座談会は白熱した議論を展開している。密告やスパイ活動の日常化は、個人の資質に還元して済む問題であるか。彼らは中共の極権主義の不幸な犠牲者と言えるのか。儒教文化にこの問題の遠因を求めることは妥当か。参加者は、章詒和を筆頭に、徐暁、羅原、劉自立、崔衛平、章立凡、徐友漁、盧躍剛、田曉青、梁曉燕、徐星、蒲志強の諸氏で、1957年反右派闘争の犠牲者の後裔に加え、民主化運動や維憲運動において数々の弾圧に曝されてきた公共知識人を含んでいる。

章乃器の子息、章立凡はこう述べる。キリスト教文化は、宗教裁判所において神への密告を制度的に保障するものだった。儒教文化にあっては、「親親」の原則に照らして宗族や年長者に対する密告は回避されはしたが、礼教体制がしばしば人を殺した。これに対して、レーニン・スターリンが発明した極権主義文化は、抗日戦争期の延安に移植された後、1950年代には中国全土に普及し、「魂に触れる革命」（文化大革命）という名の下で密告とスパイ活動を奨励する体制を生み出し、現在に至っている。徐友漁は、東ヨーロッパや旧ソ連で、体制が崩壊した後ようやく極権主義文化の全容が明るみに出たことと比べ、中国知識人が、極権主義のいまだ終焉しない現代中国において密告やスパイを清算する勇気を持っていることに一抹の希望を見出している¹⁾。

聶紺弩や章伯鈞における黄苗子、馮亦代は、章乃器にあっては民主党派の親友、同志たちである。特に元夫人、胡子嬰の激しい告発は良く知られている。本書の著者は、終章で、彼女が1945年に書いた小説「灘」を取り上げ、章乃器がモデルと思しい男尊主義の権化のような登場人物に触れながら、愛国と民主に向けた章乃器の思想が持つある種の限界を指摘した（223-227頁）。しかし、私はむしろ、胡子嬰が45年から57年の反右派闘争に

1) 章詒和「告密——誰把聶紺弩送進了監獄？」，同「臥底——他走進了章家大門」，「中年知識分子聚談“告密”」，羅銀勝主編『記憶的修復——『告密』事件面面觀』時代國際出版有限公司，2009年，所収，を参照。

至るまで、かくも長い間、章乃器への憎悪を持続させたことに、何か尋常でないものを感じた。章乃器に対する執拗な告発は、裏を返せば、自らの正当性と潔白を相手に納得させる行為でもある。彼女は他者を徹底的に攻撃する中で自らの無実のアリバイ作りを懸命に行っていたのではないか。章立凡の書いた『都門滴居録』（本書でもしばしば参照されている）は、彼女が章乃器と結婚する前の夫であった徐梅坤との間に起こったある出来事を記している。

徐梅坤は、中共草創期に上海の労働運動の組織作りに携わった党员である。彼は、章乃器の次弟、章秋陽たちと共に、陳独秀が指導した27年3月の上海武装蜂起に参加した。同年8月、徐は国民党に逮捕される。その獄中を訪れた妻の胡子嬰は、「浙江省の党組織を破壊して」出獄するよう、徐に懇願した。その場で、徐は提案を拒絶した。明くる28年、胡子嬰は、章秋陽の求めで徐梅坤救出に奔走していた章乃器と再婚する。以上のことは、35年に獄中から無事釈放された徐の回想録『九旬憶旧』（85年）に語られている。ただ、『大公報』主筆、王芸雲も、52年4月19日に、上海工商界の五反運動を指導した際、胡子嬰の「資産階級思想」を厳しく告発した模様だが、この出来事には触れていない²⁾。徐梅坤が胡子嬰の死後まで、その事実を伏していたからであろう。

章乃器が密告とスパイに深く傷ついたように、胡子嬰もまた、建国後、商業部副部長、中華全国工商联副委員長、全国政治協商会議常務委員、民主建国会第2期・第3期中央委員などの要職を歴任する中で、過去に冒した反革命の罪状を告発されることに怯えていたのではないだろうか。35年の救国会運動において、章乃器が李宗仁や白崇禧ら西南軍閥と秘密の電報コードを共有していたことを暴き、他方で、章乃器と協力して、方志敏の獄中書簡を宋慶齡経由で延安に届けた事実を隠蔽したのは、彼女の自己防衛のなせる結果であり、そのことで一概に彼女を非難することはできない。

章立凡や徐友漁は、こうした被害と加害が背中合わせの関係を強いるものを「極権主義」と呼んだ。中国では、ハンナ・アレントの『全体主義の起源』を『極権主義の起源』と訳しているようだから、極権主義は「全体主義」と表現して大過ないのかもしれない。けれども、モスクワ経由のこの無神論文化が、延安の整風運動以来、儒教文化（何清漣なら「帮会文化」と呼ぶだろうが）と結合したことを重視すれば、極権主義はやはり、ファシズム・ナチズム・スターリニズムの総称である「全体主義」と分けて考えるのが適当であろう。極権主義は、個人が沈黙する権利を否定し、個人の私的領域を一切認めない。それは個の尊厳を踏みにじる体制を築き上げた。このことがどれほど痛ましい個の崩壊をもたらすかは、胡子嬰の事例を見ても明らかである。本書が考察の対象とする1920～50年代の中国とは、この極権主義の創成期に当たる。であるならば、章乃器とその時代を語ることは、極権主義の起源と生成を考察し、極権主義を清算する方途を見出すことに繋がるはずである。

密告とスパイの世界と決別するためには、胡子嬰について試みたように、ある証言を別

2) 楊奎松『忍不住的“関懐”——1949年前後的書生与政治』広西師範大学出版社、2013年、138頁。

の証言と照合し、被害者と加害者それぞれの証言が持つ作為や意図を可能な限り相対化しながら、歴史の真相に近づく作業を続けることが必要であり、告発者やスパイが妻子、子女、友人であることが、被害者の救済に寄与したなどと弁護すべきではない³⁾。では、本書は、証言の持つ作為や意図を、複数のコンテキストの中に置く作業を注意深く行っているだろうか。章乃器の思想と行動に現れた愛国と民主の諸特徴に即して、本書がどのように歴史の真相に近づこうとしたかを検討してみよう。

I 胡風は本当に章乃器を「民族主義者」と考えたのか

章乃器が文革期（67年12月17日）に執筆した供述書は、「私与救国会」という題で、救国会に関する資料集（81年）に収録された⁴⁾。それが、どれだけの迫害と、どれほどの改竄を経て定稿とされたかは知る由もない。この中に、「国際主義者」であり国際的な地位を有する魯迅の葬儀に、救国会の「民族主義者」を参加させるべきではないと胡風が反対する件がある⁵⁾。著者はその経緯を取り上げて、「章乃器にとって、外からの侵略に抵抗する愛国の議論は、いわずもがなの前提として位置づけられたのである。胡らの対応にはそれなりの論拠があったといえよう」（214頁）と記す。けれども、この章乃器証言には幾重もの被害と加害のからみ合いがあり、それらを解きほぐすことなしに歴史の真相に到達することはできないように思う。

まず、この証言が書かれた67年12月の時点で、胡風は反革命集団の首領という冤罪を免れていない。章乃器が胡風を盾に、自らの正当性を訴えたかった気持ちは良く分かる。しかし、章は「いわずもがなの」民族主義者ではあり得なかった。胡風との衝突があった36年においては、なおのことそうであった。

話は34年に遡る。その4月20日、中国民族自衛委員会籌備会は「中国人民対日基本綱領」を公開発表する。宋慶齡を筆頭に、章乃器も含め1779人が署名した。実は、この文書は、33年10月27日に、コミンテルン駐在中共代表団の王明と康生が、日本帝国主義に対抗する広範な民族統一戦線を組織することを提案した6大綱領に対して、上海の臨時中央政治局が加筆修正を加えた文書である。章乃器の愛国は、そもそもの始まりからコミンテルンの国際主義との関係性の中で形成されたものだった⁶⁾。著者も、この王明・康生文書の存在を無視するわけではない。にもかかわらず、章乃器らによって「主体的に」受け入れられたことの方がより重要だと言う（40頁）。ただ、その主体性の根拠が本書の中で示されることはなかった。付言すれば、36年7月15日に発表された「団結禦侮的幾個

3) 同上, xxiv 頁。

4) 中国社会科学院近代史研究所・中華民国史研究室主編, 周天度編『救国会』中国社会科学出版社, 1981年, 430-450頁。

5) 同上, 437頁。

6) 載茂林, 曹仲彬『王明伝』中央党史出版社, 2008年, 188-89頁。原著は, 吉林人民出版社, 1991年。

基本条件与最低要求」は、章の文名を高からしめた文章だが、これも彼のオリジナルではない。先に引いた「私与救国会」（438頁）にある通り、潘漢年が胡愈之に命じて執筆させた原稿を基に、章がよりラディカルな内容に修正したものだ。

魯迅の逝去は、章と中共が以上のように密接に連携しながら抗日運動を模索していた最中の36年10月19日の出来事である。胡風と章乃器の先のやり取りは、魯迅追悼式で誰が魯迅の棺を担うかを議論する中で交わされたものだ。

当時の上海の左翼文芸戦線は「2つのスローガン」問題で深刻な内部対立にあった。周揚に代表される左翼文学者は、抗日戦争を遂行する際、国民党との闘争よりも、広範な反ファシズム民族統一戦線の結成を重視した。章乃器らによる救国会の活動も同じ偏向を有すると胡風は考えた。魯迅告別式において、救国会メンバーが棺を担うことに胡風が反対したのは、「国際主義」の立場から抗日戦争を闘うことが国民党への屈服に繋がってはならないという信念から出た行為であった。だから、胡風がこの時点で、章乃器を「民族主義者」と評した可能性はまずなかったのである。

37年7月の盧溝橋事件勃発後、中共中央は抗日戦線における独立自主と党のヘゲモニー強化をはっきりと目指すようになる。8月の洛川会議は、抗日戦線における「右傾投降主義」を強く警戒する諸決議を提出した。この頃、潘漢年は上海にて国民党との間で統一戦線の構築に向けた協議を繰り返していたが、協議は難航しており、総書記の張聞天や毛沢東は、彼に強い不満を抱いていた。6月11日、張は、劉曉を上海に派遣したと馮雪峰に伝え、劉、馮ともう一人で新しい指導部「三人団」を組織するよう提案した。8月8日、馮は上海の宣伝工作の見直しを議論するため延安へ赴くことを要請された。9月11日、潘漢年は宋子文に対して国民党の改組運動を積極的に働きかけなかったと自己批判し、「上海聯絡局」責任者の辞任を申し出たが、13日、張から慰留された⁷⁾。毛沢東が、張と連名で、潘や劉に対して、「国民党に対する投降主義の傾向」を是正する書簡を提出するのは10月13日であり⁸⁾、11月12日の党活動分子会議において、統一民族戦線における投降主義を示す一例として、上海の「章乃器主義」が名指しで批判されたのであった（「上海大原失陥以後抗日戦争的形勢与任務」）。

ここに及んで、潘漢年は、「まず国民党を改組し、その後、政府を改組し、軍隊を改造する」という中共中央の指示に基き、「章乃器主義」を克服するための文章を起草した。それが「群衆動員的基本問題」（9月19日）に他ならない。ところが著者は、潘のこの文章が、保甲制や紅槍会など既存の基層組織に依存した民衆動員しか構想できなかった章乃器を批判することを眼目に書かれたものだとして解釈した（72-75頁）。そうした解釈は、36年の救国会活動時の両者の緊密な協力関係がなぜここに来て急速に冷却化したかを合理的

7) 中共中央党史研究室張聞天選集伝記組、張培森主編『張聞天年譜（1900-1976）』上巻、中共党史出版社、2000年、311、320、343頁。

8) 中共中央文献研究室編、逢先知主編『毛沢東年譜（1893-1949）（修訂本）』中巻、人民出版社・中央文献出版社、2013年、32頁。

に説明できるであろうか。両者の論争の背後には中共中央の統一戦線をめぐる大きな方針転換が存在したのである。

また著者は、11月12日の毛の会議報告が『毛沢東選集』第2巻（52年4月10日）で初めて公表されたことから、「章乃器主義」批判が37年当時のものだと判断することに一定の留保を行っているようである（19, 69頁）。しかし、「章乃器主義」批判が49年10月以前に書かれた確かな証拠がある。まず、それは中共7全大会にて中共黨員に向けてなされた毛の秘密報告（45年4月24日）において言及された⁹⁾。また、評者は中共晋冀魯豫中央局編『毛沢東選集』（2巻本, 48年）を所持しているが（これは、45年5月に鄧拓が主導し晋察冀分局中央宣伝委員会が編纂した『毛沢東選集』5巻本から数えて21番目の版本で、建国前に出版された最後の選集に当たる）、その上冊「三、抗戦以来」には、現在の選集の文章と全く同じものが載っている。ただし、晋冀魯豫中央局本には、「章乃器」に関して、現行本にあるような注釈（章の「少号召多建議」を取り上げ、直接人民に呼び掛けるのではなく、国民党にだけ建議することの誤りを説き、最後に、「しかし、彼はしだいにこうした誤りを認識するに至った」で終わる）がない。この注釈は、章立凡が「章乃器与中共領袖們（二）」¹⁰⁾で明らかにしたように、52年の選集第2巻出版に当たって、毛がわざわざ章乃器を中南海に呼び、章本人の了解を得た上で加筆したものだ。

もともと、毛が「章乃器主義」の例として『申報』37年9月1日掲載の「少号召多建議」を取り上げるのは、歴史の真相を歪めるものである。なぜなら、章立凡も述べる通り、救国会を救国協会へと改組する際、錢俊瑞らが会の実権を握ったことへの反発から、この文章は書かれたのであって、中共中央の政策を批判することが章乃器の当初の目的ではなかったからである。57年の反右派闘争が、この「章乃器主義」を激しく弾劾したことは周知の通りである。そうした攻撃から章が自分を守る最後の砦は、「民族資産階級」というアイデンティティー以外にはなかった。悲しむべきことに、67年に至るまで、章乃器が自らを頑なに「民族主義者」に比定したことで、彼の愛国の主張が国際社会へと開かれていた経緯は歴史の闇の中に葬られることになった。

II 章乃器を「中間党派」の代表者と見ることは妥当か

現代中国が「民主」の実現を重要な政治課題としていることは事実である。しかし、中共が大陸に統一政権を樹立する過程で、民主の実現はプロレタリア独裁に従属する政治目標へと変貌した。1947年11月30日のスターリン宛て電報で、毛沢東が民盟を初めて「民主党派」と呼んだことが、そうした変貌を象徴している。それまで「中間党派」、「各抗戦

9) 毛沢東「在中国共産党第七次全国代表大會上的口頭政治報告」、中共中央文献研究室編『毛沢東文集』第三巻、人民出版社、1996年、316-317頁。

10) 章立凡「章乃器与中共領袖們（二）」の「八、毛沢東礼賢下士」、『百年潮』2000年第4期、所収、を参照。

党派」,「抗日小党派」と呼ばれた第三勢力は,48年1月の民盟再建と民革樹立を境に,中共の新民主主義に賛同し,中共のヘゲモニーを受け入れる「民主」党派となり,自由主義と社会主義の間で第三の道を模索する「中間」党派であることを止めた¹¹⁾。

56年11月に至り,事態は更なる展開を遂げた。毛沢東は,スターリン死後の雪解けの流れが,未完の東欧革命を惹起したことに衝撃を受け,8期2中全会(56年11月11-15日)において,プロレタリア独裁下で党の官僚主義を告発する人民の異議申し立ての権利(デモ・ストライキの権利)を「大民主」と名付けたのである。国際部の王遥や李之慎による,憲政や議会制の実現という民主に関する建議は一蹴された¹²⁾。この直後の整風運動は,毛からすれば,多分に抑制された「小民主」に過ぎず,文化大革命において,彼は自らが理想とする(大)「民主」の実現に向けて最後の闘争を展開するのである。

民盟や民建の構成員は,48年の「民主党派」という呼称への変更を拒絶していない。第三勢力として中国政治を動かそうという野心を,彼らは48年時点で喪失している。だが,その彼らでさえ,プロレタリア独裁の人民動員の原理に民主が援用されることまでは予期できなかった。

章乃器をこうした第三勢力の動きの中に置けば,彼の特異性はより際立って現れる。著者は,憲政は民主であるという毛沢東のテーゼによって,章乃器の憲政軽視の思想が生まれたと考えるが(113-114,119頁),毛が憲政を民主の属性と見なしたことは,憲政よりも民主を重んじたからではない。毛にとっては,憲政であれ,民主であれ,いずれもプロレタリア独裁に奉仕する道具に過ぎない。章においても,憲政ならびに民主は,個の尊厳を超える,あるいは同じことだが,「強烈なまでの主体性」(219頁)を凌駕する価値を持つものではなかった。若き章乃器が「征求同志」(『新評論』第1期,27年12月15日)に書いたように,「完全に傍観者の眼で,公平な議論を發表すること」が,彼の一贯した政治目標であった¹³⁾。章が「第三勢力の動きに関与した形跡」(92頁)をほとんど見出せないことには,それ相応の理由がある。

けれども,矛盾したことを述べるようだが,章乃器が傍観者の眼による「知識人の統一戦線の組織化」を実際に実現できたか否かは,それとはまた別の問題である。「知識人の統一戦線を国共両党から自律的な存在とすることで,その政治的独自性を發揮させよう」(218頁)とする試みは,ついに成功することがなかった。むしろ,「社会主義との親和性をその政治生活の最後まで持ち続けた」(219頁)と述べる方が,ことの真相に近い。

章乃器という人物は,国民革命に参加したそもそもの始めから,「国共両党から自律的な存在」どころか,中共の同伴者に他ならなかったと言うべきである。彼が中共との間で

11) 胡大牛主編『中共中央南方局統戰史論』人民出版社,2008年,369-371頁。

12) 沈志華『思考与選択』(中華人民共和国史・第三卷(1956-1957))香港中文大学出版社,2013年,432-434頁。

13) 李玉剛「戦時章乃器赴皖仕桂的前因後果——一個来自“第三方面”的独特個案」,中国社会科学院近代史研究所民国史研究室,四川師範大学歴史文化学院編『一九四〇年代的中国』上巻,社会科学文献出版社,2009年,所収,を参照。

密接な関係を構築するに当たっては、長兄の章培と次弟の章秋陽の果たした役割が大きい。章培は、保定軍官学校同期の白崇禧と深い親交を結び、次弟の章乃器が救国会を組織する際、蒋介石に対抗する統一戦線を築き上げる上で重要な橋渡しを行った。すでに紹介した27年3月の上海武装蜂起では、三弟の章秋陽と協力して、12名の中共党員を獄中から解放し、上海警察庁第一総局長の職を解かれている。49年2月に香港から北京入りし、建国後は中国人民解放軍軍事学院の戦車組組長などを務めた。57年に章乃器が右派として軟禁生活に入った後、彼の名誉回復に奔走したのはこの長兄であった¹⁴⁾。

章乃器が中共の同伴者となる上で、次弟、章秋陽が与えた影響はより甚大であった。章乃器はこの次弟の求めに応じて、実業家銀行副經理、徵信所理事長という社会的地位に応じた金銭面での援助や社会上層のネットワーク提供を中共に対して行った。そうした中共との協力関係は、彼が安徽省の国民党政府官僚に転身した後も、新四軍への資金援助という形で続いた。民建の創設も、単純な中間党派の組織化ではなかった。45年9月17日、重慶談判に臨んだ毛沢東と初めて出会った際、中国民族工業の更なる発展を囑望され、中共の民族資本援助の具体策を紹介されたことが、その直接の契機となっている¹⁵⁾。民建は、中共中央南方局（王明、周恩来を指導者とする）によって、統一戦線結成のため39年に組織された「星五聚餐会」を母体とすると言っても良く、そこでは胡子嬰も重要な役割を演じていた。章乃器が中共の深い影響下にあったことは、彼の知人にも広く認識されていた。45年以後の香港での共同事業者である陳光甫が48年12月28日に記した日記には、『大公報』が主催した幣制座談会に参加した際、千家駒や章乃器が浅薄極まりないマルクス主義経済学を信奉していることを痛罵する件がある¹⁶⁾。

傍観者の眼を持ちながら、行動様式としては中共の同伴者たらざるを得なかったこと。その矛盾が一挙に噴出するのが57年の反右派闘争であったのは言うまでもない。

そうした中共の同伴者、章乃器が深く共鳴した政治家が劉少奇であると著者は述べ、劉の「天津講話」と章の経済思想の類似性を追跡した（134-137頁）。その有効性を認めた上で、評者はここで、劉以外に章乃器に影響を与えた中共の人物として陳雲を取り上げたい。

陳雲は、上海商務印書館党組織における章乃器の次弟、章秋陽の同志である。1935年7月初め、遵義会議で生まれた新しい指導部や長征の経過をコミンテルンに伝達する途上、上海に滞在した折、白色テロの立ち込める上海で陳雲がまず連絡を試みたのが、上海の有力実業家である章乃器だった。彼を通じて、陳は章秋陽を始めとする上海地下党組織を見つけることができた¹⁷⁾。建国後の49年7月12日、陳を責任者とする中央財經委員会が発

14) 陳木雲「陸軍大学主任教官章培中將」、『青田百名將軍録』42（『陳木雲博客』<http://qtcm.blog.163.com/blog/static/9356432020121044123362/>）（2014年8月23日閲覧）を参照。

15) 前掲『毛沢東年譜（1893-1949）（修訂本）』下巻、26頁。

16) 上海档案馆編『陳光甫日記』上海書店出版社、2002年、212頁。

17) 中共中央文献室編、金沖及・陳群主編『陳雲伝』（上）、中央文献出版社、2005年、179-181頁。

足した際も、章乃器は委員の一人として参画した。陳本人が証言したように、この財經委員会での章乃器の最大の貢献は、「統一購入・統一販売」政策の策定であった。それは、「買付・配給」という言葉が強制的な響きを持つのを嫌った毛沢東に対して、章が提案した造語であった¹⁸⁾。陳雲は、改革開放後、中央紀律検査委員会委員長として章乃器の名誉回復を実現した。

丁東が紹介する『中国国家機関党委対 106 名右派分子的処理意見』(58 年 2 月 9 日)によれば、章乃器は、反革命の度合いに応じて 6 レベルに分けられた罪刑確定において、軽い方から 2 番目の「5 類」(降職・降級・降薪)に分類されていた。章は、右派の中で最後まで罪状を認めず、「極右分子」のレッテルを貼られた人物である。その人物がなぜ、このような軽罪で済んだのか。章の「国際的」知名度にその理由があると丁東は分析している。章乃器だけではない。章伯鈞、羅隆基、費孝通など名だたる「民主党派」出身者は全て 4～5 類の処分であった。いずれも、その「国際的」知名度を中共中央が考慮したためである。他方で、顧准、戴煌らは 1 級処分を受け、労働教養と監督労働に服した。にもかかわらず、丁東も述べる通り、こうした試練を契機に、彼らは不朽の著作を世に残すことができた¹⁹⁾。傍観者の眼を持ち、中共の同伴者として行動した章乃器は、同じ頃、北京飯店で「小姐」たちと日々ダンスに興じていた。彼の肉体を救済したのは、その民族主義者の矜持ではなく、国際主義者としての知名度だった。しかし、彼はその精神をも救済されたのだろうか。退廃的とも見える彼の晩年は、傍観者の眼を持ちながら、傍観者であることを最後まで貫けなかった人生の悲哀を漂わせている。

章乃器の愛国と民主は、その証言の重層的な構造に光を当てたとき、思いがけない陰影に富んだ姿を我々の前に現出する。しかし、彼の愛国と民主を最終的に挫折させたものは、愛国と民主を背後で使唆する極権主義に他ならなかった。

章乃器に関する我が国で最初の専論である本書を検討して改めて痛感するのは、現代中国の愛国と民主が、「国民国家」(vii 頁)建設という同質的空間を創出する試みとは大きく異なる機制に支配されていることだ。章乃器の思想の中に「国民国家」建設の契機を見出す試みは、「国民国家」とは似ても似つかぬ怪物に翻弄される結果に終わる。そう述べたからと言って、章乃器の思想と行動を探求するという困難極まりない仕事を最初に成し遂げたのが本書であるという名誉は些かも損なわれるものではない。評者の限られた知識のため、本書が提起した全ての論点を考察することはできなかった。また、行論には武断に過ぎるところが多々あると思う。識者の寛恕を請いたい。

(おがた やすし・神戸大学大学院人文学研究科教授)

18) 同上、850-851 頁。

19) 丁東 『中国国家機関党委対 106 名右派分子処理意見』研究, 『1950-1960 年代中国当代社会史史料研討会』華東師範大学 2010. 12. 18-19, 所収, を参照。